研究ノート

長島愛生園を訪れた人々－昭和 61 年から平成 2 年まで－

People who visited National Sanatorium Nagashima-Aiseien: from 1986 to 1990

山根（吉長） 智恵[1)]

Chie Yamane-Yoshinaga

キーワード：ハンセン病、解放、架橋、言語接触、言語生活
Keywords : Hansen's disease, liberation, bridge-building, language contact, language behavior

1. はじめに(1)

日本におけるハンセン病患者(2)は、政府が施行した 1907（明治 40）年の「らい予防に関する件」という法律により、療養所への収容・隔離を余儀なくされることになった。戦後の特効薬の出現により、ハンセン病は治療可能な病へと変わったが、1953（昭和 28）年に成立した「らい予防法」は、実質的には療養所への強制収容に近いものであった。しかし、戦前から療養所を訪問する人はおり、1958（昭和 33）年からは、無菌の者はバスレク（バス旅行）で島外に出ることも許されるようになり、また社会復帰も可能となった。さらに、1988（昭和 63）年には悲願の「邑久長島大橋」が開通し、長島愛生園（以下、愛生園とする）・邑久光明園（以下、光明園とする）という 2 つの療養所を持つ長島は、初めて本土と結ばれることになり、車があれば時間を気にせず島外に出られるようになるのである。

筆者らの研究課題である「ハンセン病療養所入所者の言語生活」は、隔離された中で生活を送ってきた入所者の言語生活を調査・分析することで、現在愛生園・光明園の入所者に対する聞き取り調査やインタビュー談話を分析している段階である。しかし、拙稿（2014、2015、2016）でも触れたように、戦前からこれらの療養所には多くの人々が訪れており、言語接触という観点からは、訪問者の状況についても調査しておく必要がある。本稿では、

1) 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

1986（昭和 61）年から 1990（平成２）年までの園誌『愛生』に記された愛生園への訪問者を、架橋前・架橋後の比較という観点も取り入れながら、架橋が言語接触に及ぼした影響について考えてみたい。

2．1986（昭和 61）年から 1990（平成 2）年までの状況

この 5 年の最も大きな出来事は、何と言っても 1988（昭和 63）年の「邑久長島大橋」開通である。しかし架橋実現には長い年月が費やされた。また、何度も暗礁に乗り上げ、実現が懸念されるような事態も起きた。本章では、まずこの架橋実現までの道のりについてまとめ、次にその喜びを記した入所者の文芸作品を挙げ、最後に架橋以外のおもな出来事についてまとめる。

2．1．架橋実現までの道のり(3)

長島に橋を架けることを最初に提案したのは、1957（昭和 32）年、愛生園の高島園長だった。海上目測 250 メートル、経費概算約 1 億円の架橋計画について、大蔵省は愛生園・光明園の合併を条件に同意したと言う。しかし、規模の小さい光明園で、入所者・職員ともに吸収合併への憂慮から反対運動が起こり、計画は幻となった。

昭和 40 年代、菌陰性者が増えた両園では外出者も増え、船での行き来に不便を感じるようになった。それに加え、橋が架かれば物資の搬送も楽になり、さらには地域社会との交流も増えるのではないかという期待もあった。創立 60 周年に当たる 1969（昭和 44）年、対岸の瀬溝に歩道橋を架ける構想が光明園で持ち上がる。しかし、地区の住民などから反対運動が起こり、それを説得するには、光明園・愛生園両園の意思統一が必要だということになる。

1971（昭和 46）年、愛生園・光明園の両園自治会は、県道の延長としての架橋を求める意見書を、岡山県議会土木委員である元浜県議を通して提出し、9 月の定例県議会で採択される。翌年 5 月、両園自治会は長島架橋促進委員会を組織し、第 1 回合同委員会を開く。そこで関係省庁への運動は、地元邑久町、岡山県から行うことが了解された。邑久町陳情に先駆けて訪ねた地元虫明の有力者である松本町議からは、「もともと虫明は土地が少なく、用地買収に困難が予想される」「超党派で一致団結した運動でなければ目的は達成できないだろう」という助言があった。また、7 月に高島愛生園長、守屋光明園長が岡山県土木部に出向いたところ、①財政的援助はできないが、技術援助、アドバイスはする、②町道は県道に格上げになる、③長島へのバスの運行は公道であることが条件である、と回答された。10 月、施設・入園者合同委員会は、長島架橋促進請願書を、厚生大臣、岡山県選出国会議員、岡山県知事、邑久町長他関係者に提出する。

しかし、ここで問題となったのは、長島が国有地であったこと、多額の経費をどこが分担するのか、ということであった。また、上述した松本町議の助言にもあるように、地元をどのように説得するかという課題もあった。実際、1974（昭和 49）年 7 月には、厚生省（現厚生労働省）から「架橋の必要性は認めているが、全国の療養所の整備が遅れており、整備を優先するので厚生省で予算化は難しい」「調査費を組むことは、架橋を認知することになるので、調査費予算は難しい」という回答が返って来ている。この年の 11 月、入園者合同委員会は国会陳情を行うことになり、長島架橋に最も関心を持っていると思われた橋本代議士を訪ねたが、「長島に起こった汚水処理問題（長島の汚水が虫明湾に流出し、

養殖牡蠣に影響を及ぼしている）は架橋に優先する」という回答しか得られなかった。

1975（昭和 50）年に入っても、建設費について、邑久町議会からは「邑久町の財政負担は一切できない」という回答、厚生省からは「長島架橋は地元邑久町、岡山県が考えてほしい」と平行線のままであった。しかし、1976（昭和 51）年になり、自民党・大村代議士、社会党・柴田代議士、公明党・山田代議士、共産党・寺前代議士、神谷代議士が責任者になり、超党派の体制が整えられた。また、架橋が全国国立ハンセン病患者協議会（略称：全患協）の要求項目に組み入れられ、予算の方法については、厚生省側から厚生省が建設省（現国土交通省）、自治省(現総務省)と協議する、長野岡山県知事からは、架橋を岡山県の施策の重点項目に入れることが示された。それを受け、邑久町も厚生省に架橋の要望書を提出するという動きになるのである。動きに拍車をかけたのは、9 月の台風 17 号である。雨量が 1000mm を超え、土砂崩れで、一時は療養所の移転まで話し合われるほど壊滅的な被害を受けたからである。

1977（昭和 52）年、木下邑久町長からは「特別委員会を設置したので、これまでより強い取り組みができる」という回答があったが、岡山県衛生部長の回答は「国、県、町が一体となっての負担でないと困る」「地元の賛成が得られなければ具体案が作れない」であった。「私は、高松宮妃殿下から長島架橋の依頼を受けているので実現に努力する」と協力姿勢を見せている橋本代議士からも、「厚生省だけでは難しいから、公共事業ということになる。そのためには県の盛り上がりがほしい」という要望があった。

1978（昭和 53）年、中国地方医務局の経理課長、岡山県の副知事・衛生部長・公衆衛生課長・土木部道路課長、邑久町長・建設課長、愛生園・光明園の事務部長が集まり、第 1 回長島架橋三者協議会が開催される。その後、継続的に協議会が開催されるが、そこで出された問題点は、①本土側の道路をどうするか、②島内道路の扱いをどうするか、③事業主体をどこにするか、④架橋後の管理をどうするか、であった。

1979（昭和 54）年、架橋に理解のある橋本氏が厚生大臣になる。ここを好機と考え、入園者合同委員会は毎月のように会議を持ったり、また陳情したりするが、邑久町負担分はどうなるのか、公共事業として進められるのか、の問題が残り、なかなか進展しなかった。特に町での事業計画を求める厚生省に対し、計画を立てるための調査費を出す余裕がない町としては、簡単に架橋に賛成するわけにはいかなかった。そうこうしているうちに、10 月、新内閣が誕生し、厚生大臣が交代することになり、大臣の鶴の一声で事態が進展するというわけにはいかなくなってしまうのである。

1980（昭和 55）年は、愛生園にとって、療養所開設 50 周年という節目の年である。架橋運動は、この節目の年にこの橋を「人間回復の橋」と位置づけ、実現に向けて関係省庁に出向くだけでなく、①近隣地域（岡山東部一帯）に架橋の意義を知ってもらう宣伝ビラを作成し、配布する、②マスコミに呼びかけ、支援を求める、③島内外に架橋促進の立て看板を置く、④全患協各支部の支援を要請し、署名カンパをお願いするなど、身近な所から意識を高めていこうという方針を立てた。そして、架橋に寄せる入所者の熱い想いを綴った作品を、厚生省、中国地方医務局、県・町の関係者、報道関係宛に発送した。こういった活動が山陽新聞に掲載されたり、ラジオで放送されたりし、架橋に対する関心も高まっていった。8 月には近隣の西大寺、備前市、岡山市などの街頭でビラを配布し、それは東京の霞ヶ関駅でも行われた。この時追い風となったのが、埼玉県富士見産婦人科病院の

不祥事である。この問題で当時の大臣が辞任し、新たに園田氏が厚生大臣に就任する。ハンセン病療養所・菊池恵楓園のある熊本県出身だった園田氏は、架橋に理解を示し、入所者の直接陳情受け入れを決めるのである。9 月 30 日、光明園では売店前広場で決起集会が開かれる。愛生園でも日出広場に約 450 名が集まり、長島架橋促進突破総決起大会が開かれる。そして、「強制隔離の島、長島に橋を架けよ」「人間回復の橋を実現させよう」という横断幕を張り、園長からの激励、自治会長の決意表明などのスピーチが行われた後、横断幕を張ったバスは両園合わせて 50 名の代表団を乗せて上京し、10 月 2 日、大臣室で園田大臣から「この橋を強制隔離の必要のない証として実施したい」という回答を得るのである。その結果、予算は建設省負担、町の負担金は起債、特別交付金で解決するという計画が立てられることになった。

ところが、これであとは計画通り順調に、というわけにはいかなかった。架橋のためにかかる予備調査費をどこが負担するかという問題が出てきたのである。さらに海上架橋のための調査には 3 年以上必要だということ、施設整備費で実施する場合は組織上、全患協各支部の合意を得なければならないこと、漁業補償を解決しなければならないことなど、なお課題は残されていた。しかし、橋本代議士の尽力もあり、1981（昭和 56）年、大蔵省局長折衝で 211 万 7 千円の予備調査費が認められ、なんとか第一歩を踏み出すことが可能になる。最終的には、1982（昭和 57）年 5 月、厚生省直轄事業として行われることになり、211 万 3 千円が予備調査費として決定する。そして 1982（昭和 57）年度調査費で地質調査が行われ、橋に関連する本土側道路は県と町が責任を持ち、さらに 3 ルート案を検討することになる。1983（昭和 58）年 6 月、3 ルートの中の 1 つに厚生省、岡山県、邑久町が合意決定し、1984（昭和 59）年 12 月、政府予算案復活折衝により長島架橋予算 1 億 300 万円が復活し、1985（昭和 60）年着工が確実になる。高島園長の思いから実に 28 年、最初の意見書提出から 14 年の歳月を費やすものであった。

1985（昭和 60）年 12 月 16 日、紆余曲折を経て、待望の長島架橋起工式が行われた。鍬入式の式場となる長島側橋台地点へは、増岡厚生大臣、地元国会議員、長野岡山県知事、元浜岡山県議員、木下邑久町長などの来賓、両園からは園長を含め約 200 名が集まり、紅白幕の張られた中に盛られた清砂に鍬が打ち込まれると一斉に拍手が起こった。また、1986（昭和 61）年度政府予算の中に、長島架橋継続予算として厚生省概算要求額 3 億 1900 万円（本土側橋台、橋脚、橋梁入札時の一部、島内道路調査費）が復活折衝で認められ、もう 1 つの橋、瀬戸大橋と同年の完成は 2 年後というところまで来たのである。最終段階になり、何度か両園促進合同委員会が開催された 1987（昭和 62）年、委員会の中で、橋に近い側にある光明園から 1 つの報告があった。それは、橋の近くにゲート用の建物をつくり、出入りの車をチェックする、という報告で、光明園の自治会と施設とは合意に達しているというのである。愛生園からは、架橋は開放の橋であるから、本来の意義からすれば自由に出入りできるのが筋ではないかという反論があったが、この段階では何らかのチェックは必要で、運用をうまく行えばよいということで終わった。そしてこの年の 8 月末、本土橋台、橋脚工事が完成。10 月 9 日には橋の中央径間部の橋桁工事が完成し、先に完成した橋脚に架設され、長島は本土と結ばれる。入所者、報道関係のヘリコプター、地元の人々、裳掛小学校の児童などが見守る中のことであった。11 月 16 日、橋の名前もこの地域の地名を入れた「邑久長島大橋」に決定した。

こうやって本土と陸続きになった長島であったが、1 つの懸案が生じる。それが前述のゲート問題であった。その規模が高さ 6 メートル、上屋は 10.34 メートル×6 メートル、そしてこの建物の中央両脇に高さ 2.25 メートル×1.8 メートルの操作用機械入れが付く、そしてそれが有料道路料金所のような型と聞いて、愛生園側は慌てる。橋が持つ「隔離の必要がない証」の意味が薄れてしまうだけでなく、ハンセン病は恐ろしいものだというイメージをも与えてしまうのではないかと。愛生園では、ゲート反対一色となり、1953（昭和 28）年らい予防法闘争以来の反対運動だという人もあるほどだった。もちろん光明園側は必要だと認めており、事態は深刻で微妙な状態となった。このような中、ゲート工事は鉄骨組みがすべて終わっていたが、一時中止となった。さらに、この状況を地元のテレビが放映、各紙が「愛の橋に『無情の門』」「人間回復の橋に検問ゲート」「人間回復の関所」の見出しで取り上げたため，ゲート反対の愛生園側に有利な方向に傾いていった。最終的には、全患協本部の幹部が両支部を訪れ、調整に努めた。その結果、①ゲートは撤去し、警備保障会社に案内所の運営を委託する、②案内所は島内道路入口に緑地ロータリー方式にして設置する、③遊漁者、不審者などをチェックする。職員・入所者・出入り業者の車については、ステッカーまたはカードを配付し、出入りを円滑にする、などが決定された。しかし、愛生園の自治会執行委員会は、6 名がこの件で会員の信頼を失ったと辞職することを決め、さらに非常勤執行委員数名からも追従して辞表が出されたため、自治会執行委員会の機能は停止した。

1988（昭和 63）年、辞表は撤回され、漁協からも上記の愛生園案への了解が得られたため、検問ゲート設置問題も結着し、開通式も 5 月 9 日と決定した。1987（昭和 62）年 10 月 9 日の邑久長島大橋結合の日と同様、報道関係のヘリコプターが飛び交う中、午前 11 時、長野厚生政務次官、長野岡山県知事、木村邑久町長、橋本元厚生大臣、大村・秋山国会議員、元浜県議、木下前邑久町長、両園長、入所者代表などによるテープカットの後、くす玉が割られ、邑久高校のブラスバンドを先頭に渡り初めが始まった。そしてその後、「勤労者いこいの村」で竣工式、祝賀会が行われた。翌日、愛生園では福祉会館前で祝賀行事として花火の打ち上げ、一人 1 つの風船上げ、酒樽の鏡割り、餅つき、アトラクションとして岡山ライオンズクラブ斡旋による大相撲式守祐之助士による「しょっきり」、備前市民謡クラブによる手踊り、手品、漫才などが行われ、夜は園長以下職員、労組幹部、全患協各支部代表、自治会役員、各団体代表が福祉会館で祝賀会を開いた。祝賀協賛行事は 4 月 20 日から 5 月 28 日まで続き、カラオケ大会、生花展、陶芸展、盆栽展、絵画展、写真展、詩吟の会発表会、ゲートボール愛好会親善大会、老人クラブゲートボール大会、バドミントンクラブ大会、卓球クラブ大会などが行われた。光明園でも園内大通りの特設ステージで、酒樽の鏡割り、升酒による乾杯、紅白の餅投げ、歌謡ショーが行われた。1971（昭和 46）年、両園で意見書を提出してから実に 18 年、愛生園の入所者の平均年齢はおよそ 65 歳。歳月の長さを噛みしめながら、喜びの時を感じた 2 か月であった(4)。

2．2．架橋の喜び

ここでは、5 年の間に『愛生』に掲載された「俳句」「短歌」「川柳」「詩」のうち、架橋に関わるおもなものを挙げる。

(1)俳句

逝く春や　鐘楼堂より　橋が見え　　須並　一衛
橋架かり　島も輝く　聖五月　　西田　明水
幾み霊　橋の朧に　あそぶらむ　　柴田　暁星
お祝ひの　鳩海を越ゆ　五月かな　　高杉　美智子
橋渡る　一歩一歩に　霧晴るる　　林　すみれ
本土踏む　五十年ぶり　新樹雨　　牧　紫水
橋渡り　来て島眺む　五月かな　　和公　梵字

(2)短歌
偏見の　こぼたれて島に　路線バス　出で入る歓びに　生きてゐてあふ　北田　由貴子
長島大橋の　ゲートに生るる　流離感　めぐる海より　深しと思ふ　深田　冽
長島架橋　寿ぐ花火　とどろけば　わが流離感　砕かれてゆく　太田　正一
隔離解く　橋の架かりて　島ゆゑの　淀みやうやく　動きはじめぬ　金沢　真吾
開通式の　花火を遠く　聞きながら　鎮魂橋と　こころに名付く　加賀美　巧
長島に　橋架かるまで　生きたしと　言ひし亡夫を　思ひ切なし　北内　市子
幾度か　夢にし見たる　長島の　橋を手引かれ　今渡りをり　谷川　秋夫
長島大橋　渡りて帰る家はなきに　いづこよりくる　この開放感　松島　朝子
長島大橋　起点に展くる　未来あり　思ひを越えて　海はきらめく　中野　加代子

(3)川柳
いま渡る　たしかに渡る　夢の橋　　余田　加寿子
渡りぞめ　傘寿の肩に　花開く　　岡　生門
見えますか　解放の橋　アリガトウ　　本田　稔
クス玉を　割って架橋の　苦を忘れ　　中島　太
架け橋へ　祝賀疲れの　天の川　　木村　三々郎
しっかりと　遺影を抱いた　初渡り　　山本　徳子
橋渡る　万感胸を　かけめぐり　　小川　千恵子
悲願橋　ふみしめ過去を　ふりむかせ　　林　町子

(4)詩
「邑久長島橋」　　千鳥　四郎
1．瀬戸の小島が　緑に明けて
　朝の陽光（ひかげ）が　一ぱい射して
　西の端なる　岬の海辺
　銀に輝く　アーチの橋は
　これぞわれらが　邑久長島橋
2．運動続けて　十六年余
　多くの人の　支援があって
　やっと架かった　本土とつなぐ
　ライトグレーの　アーチの橋は

われらが人間　回復の橋
3. 夕べの鐘が　鳴りわたるとき
茜の空は　色なお増して
泣いた昔を　ふと思わせる
赤く染まった　アーチの橋は
明日を約する　邑久長島橋

「墓碑銘」　　島村　静雨
忘るるなかれ
骨肉の絆を断ちて
この海を
悲傷で越えて
還らざりき
幾千の病友（とも）
島（ここ）に永眠（ねむ）るを

「橋」　　水原　久雄
今日　願望の橋を渡った
きれいな橋の顔があった

石ころ一つない橋
彼も　彼女も　俺も
遠い異国へでも旅立つ思いで
一歩一歩　たしかめ　確かめ
百三十五メートルの橋を渡った

橋下に見える
瀬溝の漁港は　ふだんと変らず
橋台を洗う潮の流れは
過去の歴史に　ふれ
今日も波は静かに
ささやき
語りかけてきた

2．3．架橋以外のおもなできごと

1986（昭和61）年から1990（平成2）年までの5年の間で、架橋以外の大きなできごととして挙げられるのは以下の3点である。

まずは、1987（昭和62）年3月3日に行われた岡山県立邑久高校新良田教室の閉校式である。1955（昭和30）年9月に1学年30人の定員で開校された、定時制4年制の新良田教室は、この日最後の卒業生1名を送り出し、その使命を終えた。32年続いた教室では、

307 名が巣立った。

第 2 は、架橋に伴う、長島・虫明間の運航船廃止である。1988（昭和 63）年 5 月 31 日[5]16 時 40 分、森丸フェリーの船長に花束贈呈の後、フェリーの最終便が長島船越から出航する。また、1989（平成元）年 3 月 1 日には、14 時半から船越桟橋でセレモニーが行われ、「はくちょう丸」最終便は、職員・入所者を乗せて長島を一周する。瀬溝に向かって邑久長島大橋をくぐり、光明園、次いで愛生園の南海岸を楯岩まで、長島の外観を就航し、別れを告げたのであった[6]。

第 3 は、愛生園が開園 60 周年を迎えたことである。1990（平成 2）年 7 月に開園 60 周年記念行事企画委員会が立ち上がり、8 月 21 日には 60 周年記念と銘打った第 15 回夏祭りが開催された。記念行事として、11 月 7 日には愛生会館で春風うららによるかたり演歌、宮川青丸・トンコ、平和ラッパ・ハッパ、若井ボン・ミッサンによる漫才、宮史郎による歌謡ショー、11 月 13 日には随筆家である岡部伊都子氏を招いての文化講演会、11 月 20 日には神戸・祥福寺（臨済宗）の河野太通老師による合同慰霊祭が行われ、記念式典も行われた。さらに、10 月から 11 月にかけては、記念協賛行事としていけ花展、絵画展、写真展、陶芸展、盆栽展、ゲートボール大会、卓球大会、将棋大会、バドミントン大会が催され、総計 915 本の植樹も行われた[7]。

短い 5 年という期間だが、1987（昭和 62）年 1 月には長島ショッピングセンターが開店、1988（昭和 63）年 9 月には年金支給が現金から振り込みに、他にも入所者自警団閉団式、恵の鐘の鐘つきの手動から電動への切り替え、電話器のダイヤル方式からプッシュボタン式への取替開始、電話器の色が黒から白へなど、時代の変化を感じさせるできごとが見受けられる。スポーツに関しても、ゲートボールが盛んになり、全国ゲートボール大会に参加するまでの実力となった。また卓球クラブも結成された。

3. 訪問者の在住地域

それでは、訪問者はどのような地域から愛生園に足を運んだのであろうか。訪問者を居住地域別にまとめたものが、以下の表 1[8]である。

ここから、愛生園の所在地である岡山県からの訪問者が 1,888、69.5%と全体 7 割を占め、群を抜いて多いことが見て取れる。開通式が行われた 1988（昭和 63）年以降は約 6 割と 1 割減少するが、拙稿（2016）では 1931（昭和 6）年から 1985（昭和 60）年までは 3 割から 4 割で推移しているので、岡山からの訪問者が 2 割から 4 割増加していることになる。

岡山以外では 1985（昭和 60）年までと同様、近畿地方からの訪問者が多いが、それでも 248、9.1%と 1 割弱に過ぎない。以下、中国地方 82（3.0%）、中部地方 81（3.0%）、関東地方 46（1.7%）、海外 45（1.7%）、九州・沖縄地方 42（1.5%）、四国地方 39（1.4%）、東北地方 7（0.3%）、北海道地方 2（0.1%）と続く。近隣の近畿地方や中国地方から、また入所者に愛知県出身が多かったからか、中部地方からの訪問者も多いことが明らかであり、それは拙稿（2014、2015、2016）の傾向と変わらない。しかし、この 5 年の特筆すべき点は、上述したように岡山からの訪問者が飛躍的に増加したことである。よって、言語接触の面からは、訪問者がすべて岡山方言を話したとは言えないにしても、これまでより岡山方言を耳にする機会が増えた可能性がある。

なお、この時期、1980 年前半（昭和 50 年後半）同様、毎年のように韓国のハンセン病関係者（韓国救らい協会、韓国国立らい病院（小鹿島）看護婦長、定着村一行）、テグ大学教授、民団（在日本大韓民国民団）関係者が訪れているのが興味深い。

表１　地域別訪問者数

年	岡山	近畿	関東	四国	九･沖	中国	中部	東北	北海道	海外	その他	合計
1986	446	54	8	5	6	13	18	1		4	46	601
1987	407	37	5	8	3	18	16			5	51	550
1988	389	71	12	11	14	23	21	1	1	12	52	607
1989	369	49	14	7	16	15	16	3	1	14	43	547
1990	277	37	7	8	3	13	10	2		10	45	412
合計	1888	248	46	39	42	82	81	7	2	45	237	2717

注１　「九･沖」:九州の各県及び沖縄
注２　「中国」:岡山県を除く中国4県
注３　「海外」:海外からの訪問者（国内在住の外国人を含む）
注４　「その他」:在住地域不明
注５　空欄は「訪問者なし」を意味する。表2も同様

4．訪問者の所属機関・訪問目的

では、訪問者にはどのような職業の人が多く、また訪問目的はどのようなものであったのだろうか。本章では、訪問者の所属機関（職業）または訪問目的を、拙稿（2016）同様、①学校（中学校、高校、専門学校、短大・大学関係者。教授、教員、学生、保護者など）、②宗教団体（神父、牧師、僧、仏教婦人会など）、③ハンセン病療養所・関係機関（療養所の医師・職員・入所者、藤楓協会関係者、好善社(9)関係者、交流の家(10)関係者など）、④官公庁職員・研究所・議員（厚生省職員、中四国医務局職員、県衛生局職員、市長、参議院議員・衆議院議員、民生委員(11)など）、⑤マスコミ（新聞社・放送局・出版社の社員など）、⑥短歌・俳句・川柳・詩吟の会（指導者など）、⑦軍（軍政部関係者など）、⑧医療機関（医師、看護師、事務職員など）、⑨皇室、⑩慰問（歌手、舞踊関係者など）、⑪その他（婦人会、スポーツチーム、囲碁・将棋指導者など）に分け、その数を以下の表 2 にまとめる(12)。

表 2 から見て取れるのは、まず、医療関係者が 1,598、58.9%と半数以上に及ぶことである。しかもそのほとんどが、入所者の診療にあたった岡山大学･岡山病院の医師である。拙稿（2016）によれば、1985（昭和 60）年までは宗教関係者が最も多く、診療にあたった医師については「愛生日誌」の「施設見学及び来園者」にこれほどまで明記されていなかったことを考えると、施設見学及び来園者リストの記載内容の変化が、表 2 の数値の変化となって表れていると言えよう。

次に多い宗教関係者については、拙稿（2016）でも述べたように葬儀、布教、宗教行事催行のための来園であるが、この 5 年に複数回名前が挙がっているのは、カトリック教会関係ではヴァンホーテ神父、デマンク神父、日本人だがカルメラというシスター名を持つ稲光千賀子氏、天理教では植田慶三師、禅宗では神戸・祥福寺の河野太通老太師である。真宗では、1985（昭和 60）年までと同様、太田唯念師、蓮清典師、多田慶男師の名前が挙がっているが、特定の人物が頻繁に来園するというよりは、山陽教務所の中で担当者を

決め、月々来園していたという感がある。また、プロテスタント関係者については、在日大韓キリスト教新居浜教会のチュ・ムノン氏、禅宗においては、岡山市にある曹源寺の横井一保師･原田正道師､福山市にある安国寺の藤井禅郁師の名前が見られるのが興味深い。

この時期、官公庁からの訪問者について、特に架橋との関係もあり、毎年訪れていたのは岡山県議の元浜貫一氏である。また、江田五月衆議院議員の名も、1989（平成元）年を除き、毎年見られる。

学校関係者については、看護学校（病院・大学付属・専門学校など）からの訪問者が多く見られること、特定の学校が毎年、あるいは毎年のように訪れていることが、この 5 年の特徴である。看護学校については、地元岡山にある笠岡看護高等専修学校、金山学園高等学校衛生看護科、順正看護学校、大阪の北斗会看護専門学校、広島大学医学部附属看護学校の名前が見られる。看護学校以外では、大阪の啓光学園、兵庫の六甲学院、香川の四国学院大学の名前が見られるが、キリスト教系の学校が主であると言え、1990（平成 2）年には東京にある青山学院大学の聖歌隊も来園し、コンサートを行っている。なお、本学園に関しては訪問の記録はないが、毎年のように山陽女子中学校・高校名で 1～2 万円の寄付を行っている。

創作活動関係については、俳句の梶井枯骨氏、近藤忠氏（雲海俳句会）、川柳の大森風来子氏、短歌の大岩徳二氏[13]、陶芸の松本政昭氏、写真の葛原茂樹氏が複数年訪問している。いずれも選者や審査員として活動しており、大森、大岩、梶井の 3 氏は、長年の貢献から 1989（平成元）年、藤楓協会総裁表彰を受けている。

それ以外では、失明演歌歌手の井上わこ氏が 1986（昭和 61）年に、1989（平成元）年には歌手の渡辺はま子氏、松山恵子氏のような大物も来園している。また、同じく 1989（平成元）年 6 月 22 日には、大平山いこいの村において「貞明皇后・高松宮をしのぶ在園者慰問激励の会」が開催されたことから､藤楓協会総裁高松宮喜久子妃殿下も来園され、翌 23 日には福祉会館で入所者とともに演芸を楽しまれたことが記録されている。さらに、拙稿（2016）で挙げた藤間竹遊氏[14]は、この時期も毎年舞踊会のために訪れ、慰問を続けており、ノートルダム清心女子大学学長の渡辺和子氏、東大名誉教授の石館守三氏も講演のために来園している。

表２　所属機関・目的別訪問者数

年	学校	宗教	療養所	官公庁	ﾏｽｺﾐ	短歌	軍	医療	皇室	慰問	その他	合計
1986	23	83	27	46	4	10		363		6	39	601
1987	34	58	25	28	1	6		342		5	51	550
1988	36	73	21	56	4	5		343		7	62	607
1989	31	71	21	53		5		311	1	4	50	547
1990	24	50	12	40		2		239		6	39	412
合計	148	335	106	223	9	28		1598	1	28	241	2717

5. まとめと今後の課題

本稿では、園誌『愛生』を中心に、1986（昭和 61）年から 1990（平成 2）年までの最も大きなできごとである架橋について振り返り、そして拙稿（2014、2015、2016）と同

じく、訪問者の傾向を在住地域別と目的別にまとめてみた。ここから、入所者の言語接触について考えなければならない点が 3 点浮かび上がった。

1 点目は、岡山在住の医療関係者の来園の多さは続くのか、という点である。続けば、当然これが使用言語や理解言語に何らかの影響を及ぼすことになるであろう。2 点目は、架橋により園を訪問しやすい環境が生まれたはずだが、医療関係者を除くと訪問者数は伸びていない、という点である。訪問者数が伸びないということは、園外からの訪問者との言語接触が減ることを意味する。これも、使用言語や理解言語に影響を及ぼすのではないだろうか。3 点目としては、前章まででは触れていないが、架橋により外出が容易になったため、園外での言語接触の可能性が高くなったということが挙げられる。

今後は、架橋後の訪問者の動向とも関わらせながら、入所者の言語生活を明らかにしていきたい。

付記

本稿は、科学研究費（挑戦萌芽）「ハンセン病入所者の言語生活」（26580085）の継続研究成果の一部である。

注

(1)1 章、2 章の一部は、拙稿（2016）にも記されている。

(2)本稿では、特定の場合を除き「患者」ではなく「入所者」を使用する。「入園者合同委員会」のように参考文献に「入園者」が使用されている場合は、「入所者」の代わりに「入園者」を使用する。また、ハンセン病は 1996（平成 8）年の「らい予防法廃止法案」施行以前は「らい病」と呼ばれていた。その「らい」の表記に関しては、原則ひらがな表記としている。

(3)本節については、園誌『愛生』（特に 1988（昭和 63）年 8 月号から 1989（平成元）年 7 月号に掲載された、加賀田一「長島架橋運動 17 年の軌跡」(1)～(10)）を中心にまとめた。また、『愛生』1990（平成 2）年 11・12 月合併号の「年表」（1985（昭和 60）年～1989（平成元））年、邑久光明園入園者自治会（1989）、国立療養所長島愛生園（2010b）も参考にした。

(4)長島架橋及び関連道路整備事業費は、1989（平成元）年 7 月号の『愛生』によれば、架橋 6 億 9 千万円、道路（町道、島内）12 億 6 百万円、総事業費 18 億 9 千 6 百万円である。

(5)1988（昭和 63）年 8 月号の『愛生』には 5 月 31 日とあるが、国立療養所長島愛生園（2010b）には 5 月 26 日と記され、相違が見られる。

(6) 1989（平成元）年 5・6 月号の『愛生』に、3 月 1 日の様子と愛生園の船籍簿が記されている。

(7) 1991（平成 3）年 1 月号～4 月号の『愛生』に、開園 60 周年記念行事のことが記されている。

(8)複数名の居住地域が判明しており、それが異なる場合は、それぞれの居住地域に分けて数えた。在住地域が異なる者が会議等で来園している場合は、地域ごとに数えたが、全国会議のような場合は「その他」として数えた。なお、本稿執筆段階で居住地域が判明していない者については「その他」に含めているため、今後の調査で在住地域が判明した場合、表 1 の数字に変更が生じる可能性がある。

(9)ハンセン病国立療養所でワークキャンプを行い、入所者との交流を続けている団体。

(10)奈良市にあるハンセン病快復者と社会を結ぶセンター。http://www.mognet.org/fiwc/musubi.html, https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/029000111, http://www.asahi-net.or.jp/~fi2k-skgc/musubi.html 参照。

(11)各地域において、ハンセン病の情報を収集したり、患者やその家族の相談に乗ったりした人。
(12)大学の医学関係の教授、ハンセン病療養所・官公庁に勤務する医師・看護師などが訪問している場合は、「医療機関」ではなく、「学校」「ハンセン病療養所」「官公庁」に含めている。職業や目的がはっきりしない訪問者は「その他」に含めている。またこの時期、傷痍軍人会の訪問者はいるが、軍関係には含めていない。なお、今後の調査で所属機関や目的が判明した場合、表 2 の数字に変更が生じる可能性がある。
(13) アララギ派の歌人。短歌雑誌『炎々』主宰者。山陽学園短期大学で 1969（昭和 44）年から 1981（昭和 56）年まで勤めた。山陽学園短期大学名誉教授。
(14) 藤間（2006）pp.144-153 参照。

参考文献

大嶋得雄（1996）『約束の日を望みてー長島曙教会創立 65 周年記念誌ー』長島曙教会
岡山カトリック教会創立百周年記念事業実行委員会百年史部（1983）『岡山カトリック教会百年史』岡山カトリック教会
岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編（2009）『長島は語る　岡山県ハンセン病関係資料集・後編』岡山県
邑久光明園入園者自治会（1989）『風と海のなかー邑久光明園入園者八十年の歩み』日本文教出版
国立ハンセン病資料館編（2013）『国立ハンセン病資料館常設展示図録 2012』国立ハンセン病資料館
国立療養所邑久光明園入所者自治会編（2009）『邑久光明園創立百周年記念誌「隔離から解放へ」ー邑久光明園入所者百年の歩みー』山陽新聞社
国立療養所長島愛生園（1981）『長島愛生園創立 50 周年記念誌』国立療養所長島愛生園
国立療養所長島愛生園（2010a）『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌［第一部］80 年を迎えて』国立療養所長島愛生園
国立療養所長島愛生園（2010b）『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌［第二部］振り返れば 80 年』国立療養所長島愛生園
佐川修・大竹章・成田稔編著（2002）『ハンセン病資料館』高松宮記念ハンセン病資料館運営委員会
山陽新聞社編（2017）『語り継ぐハンセン病ー瀬戸内 3 園から』山陽新聞社
内閣府 NPO 法人ポータルサイト https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/029000111（2018 年 2 月 23 日閲覧）
長島愛生園入園者自治会（1982）『隔絶の里程ー長島愛生園入園者五十年史ー』日本文教出版
長島曙教会（1996）『約束の日を望みてー長島曙教会創立 65 周年記念誌ー』長島曙教会
藤間竹遊（2006）『槿花一朝夢』星湖舎
交流の家　http://www.asahi-net.or.jp/~fi2k-skgc/musubi.html（2018 年 2 月 14 日閲覧）
モグネット　http://www.mognet.org/fiwc/musubi.html（2018 年 2 月 14 日閲覧）
山根智恵（2014）「長島愛生園を訪れた人々ー昭和 6 年から昭和 19 年までー」『山陽論叢』第 21 巻

山根智恵（2015）「長島愛生園を訪れた人々－昭和 21 年から昭和 40 年まで－」『山陽論叢』第 22 巻
山根智恵（2016）「長島愛生園を訪れた人々－昭和 41 年から昭和 60 年まで－」『山陽論叢』第 23 巻
山根智恵・久木田恵（2016）「ハンセン病療養所入所者の方言受容」『日本語の研究』第 12 巻 4 号　p.202

分析資料

『愛生』愛生日誌　1986（昭和 61）年 4 月号～1990（平成 3）年 4 月号
『愛生』1990（平成 2）年 11・12 月合併号（開園 60 周年記念特集号　年表（1985（昭和 60）年～1989（平成元）年）